

「公」とは何か

一日露戦争と柴五郎

拓殖大学 学長

渡辺 利夫

私が奉職する拓殖大学では来年の4月1日より、大学院地方政治行政研究科を開設する。東京一極集中により地方の疲弊は甚だしい。私は山梨県甲府市の出身である。地域シンクタンクである山梨総合研究所の創設にかかわり、以来、現在まで10年余にわたり理事長を勤めている。このわずかな期間にも県内人口は減少しつづけて90万人を割り、4半世紀の後には70万人を切るというシミュレーションさえ存在する。

この季節、午後7時頃になると中心市街地の灯は消え、かつての賑わいが嘘のようである。他の県市でも事情は似たり寄ったりであろう。日本の再活性化のためには地方が活力を取り戻さなければならない。2000年から地方分権一括法が施行され、おびただしい数の関連法規が成立したものの、法律によって事態が変化するほどことは簡単ではない。地方の政治と行政を担う人材の徹底的な教育と意識改革が必要であると考えて、私どもは新研究科の創設に踏み切ったのである。

研究科創設のための記念シンポジウムを過日開いた。櫻井よしこさんをパネリストの1人にお呼びし、私ともども日本の将来に求め

られる人間像についての議論を闘わせた。櫻井さんのスピーチは、いつもながらだが、まことに論理的であり情熱的であった。「公」を重んじ「利他的」であることを志す人間をいかに形成するかに話が及んだ時、彼女は柴五郎の生涯について触れ、彼の精神を現在にいかに甦らせるかという問題を提起した。思わず“さすが”の声を出したい気分が駆られた。柴五郎といっても今の世代の人間には遠い存在であり、何者であるかさえ忘れ去られているであろう。この人物に対する私の思い入れも深いので、今回は彼について語っておきたい。

日露戦争の遠因は「義和団事変」にある。清国北方で起こった騒擾であったという意味で「北清事変」とも称される。義和団は「拳匪」と呼ばれ、独特の拳法をもってすれば敵の打つ矢、刀、銃弾が当たっても傷つくことはないと信じる新興宗教集団であり、「扶清滅洋」をスローガンとする排外主義的集団でもあった。義和団の乱は1889年3月に山東省で発生、北清地方の全域に及んだ。反乱農民が奉天(瀋陽)付近で鉄道を破壊し、田庄台のキリスト教会を焼毀、満州北部に飛び火し、馬賊や清

国官兵までが加わって吉林省に入り、再び北進して愛琿にいたり、黒竜江省対岸のロシア領ブラゴブヴェスチエンスクにおいて火薬庫を破壊、ロシアの将卒を殺害した。勢いを駈って黒竜江を航行する船舶を阻止し、ハルビンでは鉄道を破壊、旅順との通路を遮った。

義和団の暴徒が北清地域を席卷し、ついに天津を経て北京に迫り、各国公使館が集中する居留地域が彼らによって包囲されるという事態となった。居留民は恐怖に駆られ、11カ国から成る列国公使が清国政府に対して義和団の取り締まりを要求した。清国政府は兵を派して各国公使館の護衛に当たさせたが、義和団の大軍の前に制圧は不可能であった。

義和団事変の最中に清国政府内の権力構成に変化が生じた。慶親王に代わって排外主義者の端郡王が総理衙門主席大臣ならびに軍機大臣となった。彼は義和団を逆徒ではなく攘夷の義民とする方針をとり、義和団に清国兵を投入して外国人討伐の挙に出た。列国公使は清国政府への保護依頼を諦め、天津近くの大沽に停泊中の日本軍艦に兵士の派遣を要請し、旅順、威海衛、膠州湾から各国の軍艦を大沽に回航させ、これら兵士を天津から北京に向かわせた。義和団は北京の公使館居留地域を取り囲み、天津に進軍し、北京・天津間の連絡を切断した。清国兵が北京側に陣を張り、背後の天津側には義和団が居座った。11カ国連合軍は兵站が尽きて万事休すの事態となった。6月13日には日本公使館書記生の

杉山彬が清国兵によって殺害された。

ここで連合軍は大沽の砲台を占領して活路を開くことを決意した。大沽砲台を占拠する義和団からの砲撃に耐え、砲台の背後を衝いて占領に成功した。しかし連合軍の現勢力だけで天津と北京を守り切れないのは明らかであった。清国総理衙門は列国公使に対しこれ以上の守護はできないので、直ちに天津から他所へ撤退するよう勧告を出した。ドイツの在清公使フォン・ケッテラーは援軍を待つまで天津に留まる旨を総理衙門に伝えようと北京に赴く途上、清国兵に殺害された。

列国の中で北京、天津に最も近い日本からの援軍に頼るより他に策はなかった。当時駐露公使であった小村は列強の姿勢を鋭く観察し、外務大臣青木周蔵に対して「如何なる変局に会するもこれに応ずる違算なきの準備を立つるを緊要とし、この目的に対し、かつ事変の最終解決に際し、欧州協同の外に置かるゝことなからしめんが、我国はその兵力並びに清国に於ける陸海軍の行動に於て、終始少くも最強国と均等を保有せざるべからず」と進言した。

日本の派兵は7月15日であった。これに勢いを得た連合軍は通州を占領、次いで日本軍を先頭にして定福庄へ前進、さらに北京攻撃のための布陣を敷いた。日本軍が長陽門街道の以北、ロシア軍が以南に位置し、英米軍がさらにその南に位置した。14日の未明に日本軍の一隊が長陽門、もう一隊が東直門に達し、

前者が長陽門を爆破して城内に突入、15日払暁に公使館区域に到着、列国の居留民を救助して義和団の乱は鎮定された。

さて、柴五郎である。柴は日清戦争においては大本営陸軍参謀、日清戦争後は駐英公使館付武官となり、つづいて赴任した在清公使館付武官として勤務中に義和団事変に巻き込まれた。在清公使館勤務の後、日露戦争において野戦砲兵第15連隊長として勇名を馳せ、1919年8月には陸軍大将にまで上りつめた沈着冷静にして勇猛果敢な、帝国明治を代表する指揮官の1人であった。

村上兵衛の著作の中に『守城の人』という著書がある（光人社、1992年）。サブタイトルは“明治人 柴五郎大将の生涯”である。柴の一生を深い哀惜を込めて描いた名作である。北京公使館区域防衛の要に位置する肅親王府に陣取り、無数の敵軍に包囲されて狼狽^{うろた}える連合軍と居留民の中に立ち、水際だった攻守の機略をみせた「天性の軍人」の姿を村上は活写している。村上は、柴の指揮下に入ったB. シンプソンという当時22歳のイギリス義勇兵の1人に次のように語らせている。

「数十人の義勇兵を補佐として持っただけの小勢の日本軍は、王府の高い壁の守備にあたっていた。／その壁はどこまでも延々とつづき、それを守るには少なくとも五百名の兵を必要としていた。しかし、日本軍は素晴らしい指揮官に恵まれていた。公使館付武官のリュウトナン・コロネル・シバである。／彼

は、他の日本人と同様、ぶざまに硬直していた足をしているが、真剣そのもので、もうすでに出来ることと出来ないことの見境をつけていた。／ぼくは長時間かけて、各国受け持ちの場所を見て廻ったものだが、ぼくはここではじめて組織されている集団を見た。／この小男は、いつの間にか混乱を秩序へとまとめていた。彼は部下たちを組織化し、さらに大勢の教民たちを召集して、前線を強化していた。実のところ、彼はなすべきことをすべてやった。／ぼくは、自分がすでにこの小男に傾斜していることを感じる。ぼくは間もなく、彼の奴隷になってもいいと思うようになるだろう」

世界最大の陸軍大国ロシアに挑んで日本がこれに勝利したのは奇跡のごとくである。しかし事実をよく見据えてみれば、日露戦争の直前に日本が当時の海洋覇権国家イギリスとの同盟締結に成功していたことが最大の要因であったことがわかっていく。イギリスはこの同盟によりフランス、ドイツの蠕動を完全に制し、日本が国力のすべてを対露戦に投入できる国際的条件を作り上げることに貢献してくれたのである。

イギリスが極東の小国日本と同盟を結んだ最大の理由は、ロシアの南下政策によりイギリスが多年を要して蓄積してきた中国大陆におけるみずからの権益が侵される危険性を察知してのことである。しかし、イギリスに日本の軍人の規律、秩序、勇猛をみせつけたも

のが義和団事変であり、柴五郎の行動であったという事実を見失っては歴史のディテールは描けまい。